

佳作

夏の思ふおく白山登り

島根県 大田市立朝波小学校五年 岩谷 寛悟

「すぐろく岳には行けないかあ。」
と、六月母が言った。

「うん、予定が入って行けなくなってしまった。」
と、父がこたえた。

ぼくの家族は、毎年夏休みに、一家で登山をしている。これまで、立山、薬師岳、白馬岳などに登っている。今年は、岐阜県のすぐろく岳に行くはずだったが、他の用事で行けなくなってしまった。

ぼくは、このすぐろく岳の写真を見て、景色がとてもきれいだっただけで、ぜひ登ってみたいと思っていた。だから、だめとなり、なんだか悲しくなった。ああ、今年は登山できないのかなと思っていた。

しかし、次の日、母が

「白山に行こう。」
と言い、父も

「いっつも遠くにあるのを見ていただけだから、今年も白山に登ってみよう。」

と言った。ふう、良かった、今年も白山に行けるんだ。よし、調べてみよう。白山は、石川県と岐阜県にまたがっていて、二千七百二メートルの御前峰や二千六百七十七メートルの剣ヶ峰などがあることがわかった。登りがいのある山だ。がんばろう!!

八月三日、七時、ぼくたちは、石川県側から御前峰をめざして登り始めた。まずはテントをはるテニ場をめざして歩く。ぼくは、初めは元気いっぱいだった。しかし、ちょっとすると、キツイ、しんどい、横腹がいたいと弱気になった。まわりの姉(中一)と妹(小三)を見る。妹は、父と楽しそうにしゃべりながら後ろを歩いている。姉は、けっこうはやりで、先頭の母の後をついている。小五のぼくは、その後をついていたのだ。ぼくは、さらに苦しくなると、ペースダウンして、父と妹と一しょに行くことにした。

歩いていると中の川でかみの毛をぬらしたり、ニッコウキスゲという高山植物を見つけたりした。話も父とたくさんした。そんな時先頭の母の声があった。「テニ場が見えた。」

この言葉がぼくをはげまし、ぼくのペースがあがった。

持ちいい。最高の二日間だった。

テン場が見えてから約十分。やっと着いた。十三時だった。みんなで協力してテントをはり、少し三人で遊んだ。夕ご飯を食べて、明日にそなえて、十九時にねた。

次の日は、四時に起きて、山ちようをめざした。あたりはまだうす暗かった。歩いた。歩くにつれて明るさもましてきた。室堂で少し休けいをした。そして、また歩いた。すべりやすいところも、すべらずにクリアした。

九時、山ちように着いた。神社でおみくじをひいて、記念写真をとる。その時は、くもっていた。ところが、ぼくたちが山が描いてある円い机に行った、その時、

「おーお!!」

雲がはれて、ぼくの目の前に遠くの山々がくっきり見えた。雲と山とがいい感じで合わさっている。こんな景色見たことがない。向こうを見ると、山々がまるでせぼねのように連なっている。ほんとうに山脈だ。

下山して一日ぶりの風呂に入る。ああ、とても気